

タバコを喫（の）み始めたのは中学生の頃だった。

生意気盛りで、大人の真似ばかりしていた。銘柄はハイライトであったか、一服したらクラクラと意識が危うくなり、なんだこれ、と目を白黒させた。それでも止めなかったのは友人たちの手前、強がりであった。

高校生の時分にはいっばしで、弁当を食べ終わると学校のトイレにこもり、ショートホープ（ショッポと略していた）をふかしていた。以来、煙草とは縁が切れずにいる。

タバコは南アメリカ原産の植物で、それがスペインに伝わり、日本には安土桃山時代に輸入された。漢字で「煙草」と書くのが一般だが、他にも「烟草」や「莨」、「淡婆姑・丹波粉・多葉粉・相思草・南靈草・金糸煙・糸煙」などもある。

「烟草」の煙は、たちこめるの意。「莨」は中国では毒草、「丹波粉」は語呂合わせではなく、日本で初めて栽培された丹波に由来するそう。

そもそも外来語であったから、当て字が豊富になった。それだけ庶民にはびこった証左でもある。

古典芸能にも結びつき、例えば落語は扇と手ぬぐいでその所作を演じる。扇子をキセル、手ぬぐいをタバコ入れに見立て、二服喫んで架空のタバコ盆へトントンと灰を落とす。「あくび指南」「浮世床」「芝濱」など数多の噺はタバコのシーン抜きには語れない。もっとも最近の、大学出の噺家さんはハナっからの禁煙派ばかりと聞くから、キセルなど使いこなせるかどうか。そう言えば、不正乗車を「キセル」と呼んだのは遠い昔、今日日（きょうび）は死語である。

「おかみさんへ、お富さんへ、いやさお富、久しぶりだなあ」は、歌舞伎「与話情浮名横櫛（よわなさけうきなのよこぐし）」での、切られ与三の名セリフ。

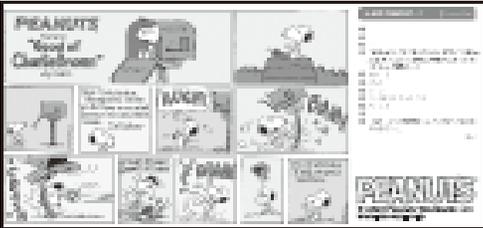
かつての恋仲、死を賭したいきさつにもかかわらずぬくぬく暮らすお富に「しがねえ恋の情けが仇」、「死んだと思ったお富が生きていたとは、お釈迦様でも気が付くめえ」——お富への愛情が募るばかりに、なじり続ける与三郎の片手に握られたキセルからは、ただただ紫煙がたゆとうばかり。弁天小僧も助六も、歌舞伎はキセルを振り回すのが当たり前なのだ。ちなみに落語は扇子と手ぬぐいだが、歌舞伎は本物の煙を出す。酒はカラで飲んでいるのに、紫煙だけは火が付いている。

10月。煙草がまた、値上がった。いよいよ年貢の納め時と諦めかけてはいるが、それでも先月は2カートン買い込んで、値上げに備える往生際の悪さである。全盛期に比べたら喫む本数は微々たるものだが、それでも何となく「死ぬまで喫み続けるだろうな」という予感はある。

もはや絶滅危惧種扱いだが、だからこそ大手を振る落語、歌舞伎が羨ましい。

「新聞に載らない内緒話」 <http://www.nikkansports.com/general/column/naisyo/news/>

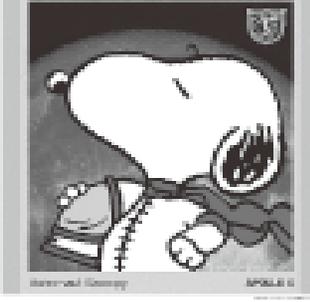
※上記のHP（ホームページ）からの原稿の転載はご遠慮ください。



Asahi Weeklyは、朝日新聞社が発行する英語学習者向けバイリンガルペーパーです

毎週日曜日発行
月額¥1,016(税込み)

お申し込みはお近くのASA(朝日新聞販売所)へ



Asahi Weekly

Crewmates are go!

朝日ウィークリーは
「ピーナッツ」のミック日曜版を
日本語訳付きで
毎週、掲載しています

朝日新聞

新聞購読料のお支払いは

口座振替
クレジット払い
が便利でお得!

わずらわしさスッキリ解消!
クレジットカードのポイントがたまる!



専用の申込書にご記入の上、ご送付ください。ASA 強い新聞・雑誌などにご利用いただけます。

お問い合わせ・お申し込みは最寄りの販売所へ